鈴木 理恵子 *SUZUKI Rieko*

鈴木理恵子著

『Negotiating History: From Romanticism to Victorianism』

（早稲田大学出版会、2012年）

On *Negotiating History: From Romanticism to Victorianism* (Waseda University Press, 2012)

本著は、19 世紀初頭における英文学史上の区分に疑問を投げかけるところから始まっている。ロマン派文学、ヴィクトリア朝文学といった具合に作品を時代区分に収めた形で読むことに妥当性があるのであろうか。仮に、ロマン派文学やヴィクトリア朝文学の最盛期に書かれた作品であれば、ある程度納得がいくものの、特に、その初期や後期に書かれたものとなると、当然、その前ないしは後との関連性が問題になってくる。本著は、P.B. シェリー（1792-1822）、メアリー・シェリー（1797-1851）、ロバート・ブラウニング（1812-1889）の作品に焦点を当て、ロマン派文学からヴィクトリア朝文学への継続性を検証したものである。具体的には、P.B.シェリーが執筆した最後の未完の詩「The Triumph of Life」、P.B.シェリーの生前にメアリー・シェリーが執筆した最後の小説『*Valperga*』、そして、ブラウニングの初期の長編詩『*Sordello*』の三作品を主として取り上げている。

「The Triumph of Life」はロマン主義の総括とも言える作品であり、ロマン主義が掲げる「愛」や「想像」といった概念が社会変革に影響を与えうるのであろうかといった疑問を投げかけている。これを受け、メアリー・シェリーの『*Valperga*』では、独裁者にまつわるロマンスという形で P.B.シェリーの暗いヴィジョンに呼応させている。しかし、この小説では、唯一聡明な主人公が女性になっており、ジェンダーの問題を真っ向から扱っている。権力欲と名声のために努める男主人公は、シェリーのような啓蒙された女主人公の助言を跳ね

除け、野望の虜となるのであるが、往々にして、男性がそのような欲望に囚われるのに対し、女性は「平和」と「愛」を重んじるといったメッセージが含まれている。このような人物像に対して、ブラウニングは反対の例を掲げて、必ずしも、ジェンダーのステレオタイプがまかり通るとは限らないことを示唆している。『*Sordello*』では、野望の虜となっているのが女主人公であり、男主人公は、逆に、人民のために尽くすタイプの詩人になっている。

以上、拙著においてロマン主義文学からヴィクトリア朝文学までの流れをP.B.シェリーからブラウニングまでという一例で提示してみた。